

聖書: ヨシュア記 4 章

説教題: いつも主を恐れるため

日 時: 2010 年 5 月 2 日

前の 3 章では驚くべき主の不思議が起きました。ヘルモン山からの雪解け水でヨルダン川は岸いっぱい溢れていたのに、主の契約の箱が先頭に立つイスラエルの前で、ヨルダン川は真つ二つに分かれました。上流から流れ下る水はつたつて、はるかかなたの町アダムのところでせきをなして立ち、一方の水はアラバの海すなわち死海の方に流れ下って、彼らの前の前には乾いた地が現れました。そして主の箱をかつぐ祭司たちがヨルダン川の真ん中にしっかりと立つうちにイスラエル全体はついに約束の地へと足を踏み入れたのです！さて今日の 4 章でも奇跡はまだ継続中です。祭司たちはまだ川の真ん中において、ヨルダン川の流れはストップしています。そういう中でヨシュアはあらかじめ選んでいた 12 人に指令を出します。4 章 1～3 節：「民がすべてヨルダン川を渡り終わったとき、主はヨシュアに告げて仰せられた。『民の中から十二人、部族ごとにひとりずつを選び出し、彼らに命じて言え。「ヨルダン川の真ん中で、祭司たちの足が堅く立ったその所から十二の石を取り、それを持って来て、あなたがたが今夜泊まる宿営地にそれを据えよ。』』」

この 12 人については前の 3 章 12 節でも触れられていましたが、この 4 章で初めて彼ら選ばれた意図を私たちは知ることができます。すなわち彼らはヨルダン川で祭司たちの足が堅く立った所から 12 の石を取って来て、それを宿営地に運び、記念碑を建てるのです。6 節に「それがあなたがたの間で、しるしとなるためである。」とあります。彼らは今回の主のみわざをただ過ぎ去らせてはならないのです。彼らはこの主の導きを忘れないようにしなくてはならないのです。

その際、「12」という数字がとても大切です。将来的にこのヨルダン川の西側に住むのは、ルベン、ガド、マナセの半部族を除く 9 部族半の人たちです。しかしこのヨルダン川の奇跡は契約の民イスラエル全体のために行われたものです。ですから一つの部族も欠けることなく、12 の石が必要です。

そのために拾って来る石は相当大きなものだったようです。5 節の最後に、各自、石一つずつを「背負って来なさい」とあります。確かに祭司たちの足をしっかり支えていた石ですから、石というよりは「岩」に近いものだったかもしれません。それが 12 個積み重ねられるのです。それは確かに遠くから見ても目立つ大きさの記念碑となることでしょう。

イスラエルの人々はこのヨシュアの指令に迅速に従います。8～9 節：「イスラエルの人々は、ヨシュアが命じたとおりにした。主がヨシュアに告げたとおり、イスラエルの子らの部族の数に合うように、ヨルダン川の真ん中から十二の石を取り、それを宿営地に運び、そこに据えた。—ヨシュアはヨルダン川の真ん中で、契約の箱をかつぐ祭司たちの足の立っていた場所の下にあった十二の石を、立てたのである。それが今日までそこにある。—」

これらの仕事が成し遂げられるまで、箱をかつぐ祭司たちは川の真ん中にいました。そしてすべての作業が終了した時に、主の箱が川を渡りました。そして再度、主の箱が先頭に立ち、その後にルベン、ガド、マナセの半部族、そしてイスラエ全体が約束の地の内側、エリコの草原を進みました。その川から上がる最後の状況について、15～18 節がもう少し詳しく記録しています。そこを見ますと、まず主がヨシュアに、箱をかつぐ祭司たちを川から上がって来させよと命じます。それを受けてヨシュアが祭司たちに、上がって来なさいと命じます。そうして彼らが上がって来た時にどうなったでし

よう。18 節に「祭司たちの足の裏が、かわいた地に上がったとき、ヨルダン川の水はもとの所に返って、以前のように、その岸いっぱいになった。」とあります。これはこのヨルダン川渡河がただ主の奇跡によることを改めて証明するものです。上流でがけ崩れか何かが起こって、水の流れが止まったのではない。祭司たちの足が岸の上に上がった瞬間、はるかかなたの町でせきをなしてつたっていた水は、たまりにたまった水がはち切れたように、ものすごいしぶきをあげながら流れて来たのです。そしてさっきまでの光景がウソのように、あっという間にヨルダン川は再び岸いっぱいになり、ごうごうと流れ始めたのです。

さて、ヨシュアは 19 節以降で記念碑の意義について語り出します。イスラエルの民は、「自分たちは神の不思議な導きによってヨルダン川を渡ることができた、ハレルヤ！」と言って、あとはこの出来事を忘れてしまうようであってはならないのです。神は特別な目的を持って、このみわざを行われました。彼らはそのメッセージをしっかり心に留めて、今後の自分たちの歩みに適用して行かなければなりません。

今回の出来事の意義について、ヨシュアは 23 節でかつての葦の海の出来事と結び付けて語っています。23 節：「あなたがたの神、主は、あなたがたが渡ってしまうまで、あなたがたの前からヨルダン川の水をからしてくださった。ちょうど、あなたがたの神、主が葦の海になさったのと同じである。それを、私たちが渡り終わってしまうまで、私たちの前からからしてくださったのである。」

明らかに葦の海の出来事と今回の出来事との間には並行関係があります。そしてこの二つには密接な関係があります。葦の海の出来事はエジプトで奴隷状態にあったイスラエルを救い出すためのみわざでした。それはイスラエルを贖う主の最初のみわざと言えます。そして主は彼らを約束の地のそばまで導いて来られて、再び同じようなみわざを行われました。このどちらにおいても、もともとは非常な困難の中にありました。葦の海の時、エジプト軍が追いかけて来て、もはや逃れる道はないと思われました。今回のヨルダン川渡河においても、季節が悪く、とても向こう岸に渡れる状況ではありませんでした。しかしそういう中で、主が不思議を行なって下さいました。この二つの奇跡に証しされていることは何でしょうか。それは「主の真実」です。途中途中で色々なことがあったでしょう。出エジプトを経験したイスラエルも、途中では本当に主は私たちを導けるのか、こんなことならエジプトに帰った方がましだ、とまで言って主を疑いました。しかしエジプトから救い出した主は再び力強い御手を現わして、自分たちを約束の地へ導き入れて下さいました。その主の真実と力強い導きを、この記念碑を通していつも思い起こさなければならないのです。

この 12 の石の記念碑は 3 種類の人々にとって意義あるものであることが示されています。その一つは子どもたちです。6～7 節、また 21～22 節にそのことが語られています。なぜこの出来事を子どもたちに伝えるべきでしょうか。これらの言葉に示されている真理は、彼ら子どもたちも主の契約の民であるということです。神は信じた者のその子どもたちも、ご自身の民として契約の祝福の内に入れて下さっています。このような事実があるので、子どもたちもその神に信頼することができるのです。子どもたちは自分たちが同じ奇跡を経験しなくても、主は同じ真実をもって神の民である私たちを導いて下さると信じて従って行って良いのです。この恵み深い神を親たちは教えて行かなければなりません。

二つ目にこの記念碑は地のすべての民に対する意義も持ちます。24 節に「それは、地のすべての民が、主の御手の強いことを知るため」とあります。主は世界の片隅の神、イスラエルに限定される小

さな神ではありません。この方はご自身の御名を全世界に証しされる神です。かつて主は創世記 12 章でアブラハムを召した時に、「地上のすべての民族はあなたによって祝福される」と言われ、全世界の民に祝福が及ぶ日のことを語っておられました。そのような宣教的な要素もここに含まれていると言って良いでしょう。

しかし何と言ってもこの記念碑の目的は、3 番目になりますが、イスラエルの民が「いつも主を恐れて歩む」ためです。「恐れる」というのは、ビクビクすることではなく、主の前にふさわしいあるべき敬虔さをもって、主を畏れ敬って従うことでしょう。その歩みがいつもできるために、この記念碑は助けになるのです。主がこの記念碑を建てて、常に思い起こせ！と命じられたということは裏を返せば主はいつもこのように圧倒的な仕方では働かれるのではないということも暗示します。もし主が一ヶ月の間に何回も劇的なみわざをなされるなら、記念碑を建てる必要はなくなります。あえて覚えようとしないで、毎日のようにびっくりする奇跡を見るわけですから。しかしそれでは信仰の歩みも何もあったものではないでしょう。主はそのように次々に不思議なことをして見せて、私たちに有無を言わずに引っ張って行くあり方ではなく、主に本当に信頼する歩みへ招いておられます。日々気ままに劇的な奇跡を要求する生き方ではなく、すでにはっきりと示され、証しされている主の真実に信頼する生活です。そうして主へのふさわしい恐れをもって歩むところに本当の祝福があります。その私たちの信仰の歩みを助けるために、主はこの 12 の石の記念碑を建てることを命じられたのです。

これはこれから行なう聖餐式にも当てはまります。主は葦の海の出来事、またヨルダン川渡河の出来事を通して、イスラエルを贖うみわざを示されましたが、それらが指し示す最も根本的かつ重大な贖いのみわざを御子の十字架においてなして下さいました。そこにおいて私たちを死と滅びから救い出し、やがての栄光へ導くための決定的なみわざをなして下さいました。私たちはこの神のみわざを良く注意せず過ぎ去らせてしまつてはなりません。まさにこれを深く心に留め、絶えず思いを向ける必要があるのです。

この聖餐式も、今日の個所の記念碑と同じように、ただ過去を振り返るだけのものではありません。1 コリント 11 章 26 節に「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」とありますように、主が来られるやがての再臨の日を待ち望むものです。またこの後の式文の中でお読みする主の言葉に「わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日まで」とあるように、このみわざは御国の完成という輝かしい将来を指し示し、それを保証するものです。その日までの間、私たちの生活には思うように行かないこともあるかもしれませんが。毎日ヨルダン川の水が干上がる奇跡が起こるわけではないかもしれない。しかし葦の海をからし、ヨルダン川の水もからして、約束の地へとイスラエルを確かに導き入れた主なる神は、御子イエス様の十字架の贖いのみわざをもって、私たちを必ず最後の栄光の救い、天の御国の祝福へ導き入れて下さいます。私たちのすべきことは、ここにはっきりと示されている主の真実に信頼することです。そして自分の様々な生活に適用することです。

主は「わたしを覚えて、これを行ないなさい。」と言われました。これからの聖餐式、その主の招きの言葉に導かれて、すでになされた偉大な贖いのみわざをしっかりと心に留めたいと思います。そして私たちの弱さを補うこの主の方法に助けられて、いつも主を恐れて歩むという最も喜びと平安と幸いに満ちた信仰生活へ導かれて行きたいと思います。